第264回　日文研フォーラム

中日文化異同論の推移

―近代以降の日本と欧米の学界を中心に―

Shifting Discourses on Similarity and Difference
in Chinese and Japanese Culture:
With Reference to Modern Academia in Japan and West

張　翔
ZHANG Xiang

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター
所長　小松 和彦

● テーマ ●

中日文化異同論の推移
―近代以降の日本と欧米の学界を中心に―

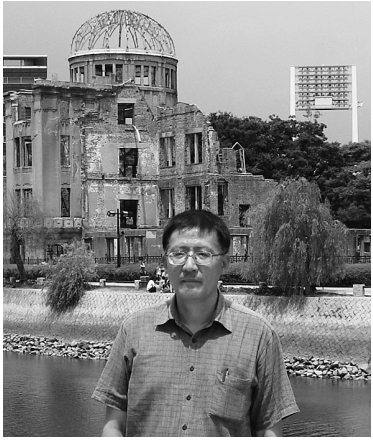
Shifting Discourses on Similarity and Difference in Chinese and Japanese Culture:
With Reference to Modern Academia in Japan and West

2013 年 2 月 12 日（火）

● 発表者 ●

張 翔
ZHANG Xiang

中国復旦大学歴史系 教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Professor, Department of History, Fudan University
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



発表者紹介

張 翔
ZHANG Xiang
中国復旦大学歴史系 教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Professor, Department of History, Fudan University
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

1957 年、中国上海市生まれ。
1982 年～中国教育部の留日院生試験選抜で広島大学文学部へ。1988 年日本史専門博士課程を修了して帰国。
1988 年以後、中国復旦大学歴史学系講師、副教授、教授、同日本研究センター研究員、中国日本史学会常務理事、上海世界史学会常務理事を歴任。
1993 年から東京大学社会科学研究所、同法学部、同文学部客員研究員、京都大学人文科学研究所客員研究員、国際日本文化研究センター外国人研究員をそれぞれ歴任。

著書・論文等

「文明開化のコース――福沢諭吉と田口卯吉」『史学研究』第 180 号（広島史学研究会、1988 年）、「『万国公法』与東亜知識人的文明観」（復旦大学歴史系編『近代中国的国家形象与国家認同』上海古籍出版社、2003 年）、張翔・園田英弘編『「封建」・「郡県」再考――東アジア社会体制論の深層』（思文閣出版、2006 年）、『中国と日本――未来と歴史との対話への招待』（共著、御茶ノ水書房、2011 年）、「隔離的政治体和共生的文化圏――日本近世後期的儒学官学体制和東亜海域的交往」（復旦大学文史研究院編『世界史中的東亜海域』北京：中華書局、2011 年）、『儒学文明化与近世日本的転化』（仮題、北京：人民出版社、近刊）など。

＊発表者の肩書・略歴等はフォーラム開催時のもの

はじめに

中国と日本とは近くて、文化的にも多くつながりを持っている隣国である。しかし、西洋の勢力が世界的に力強く拡張する中で、それぞれ違う道を辿ってきて、また現実に違う体制とイデオロギーをもっている隣国でもある。

そこで、日本の学者や知識人らが自国の文化的な歴史と現状を確かめるためにも、またこれからの進路を選択するためにも、西洋との比較研究は当然なことであるが、中国との比較研究も常に行われている。特に幕末と近代、第二次世界大戦の後といった、重大な転換期に関して、日本文化の自己評価と他者との比較は盛んに行われている。それと同時に、欧米の学界での議論も常に日本の学界に少なからぬ影響を与えているのは言うまでもない。

しかし、日本文化と中国文化との純粋な比較研究はあまり多くなかった。もちろん、暗黙の裡(うち)にそのような比較は常に行われていたが、日本文化が「東洋文化」に帰属するかど

うかにより、その評価は高くなったり低くなったりしていた。すなわち近代以降、少数のものを除けば、大多数の日本の学者にとって、日本の運命や国際的地位は、いつも「東洋」から脱出できるかどうかにより決められるので、「東洋文化」はいろいろな意味で、マイナスの面でのみ捉えられるのが常であった。

総括的に日本文化論を正面から論じた青木保氏の『「日本文化論」の変容』（中央公論社、一九九〇年）では、第二次世界大戦以後の日本文化論を取り扱っているが、主題の制限もあり、数多くの日本文化論と同じように、中国文化と日本文化の比較については、あまり詳しく述べられていない。最近では、日本の学界でも、方法論的に西洋文化との比較を専らにする日本文化論、あるいは自己満足型の日本文化論への反省が多く見られる。[1] しかし、日本文化と中国文化との比較についての成果が整理され、論じられたものはそれほど多くない。本稿では、そうした流れを逆転するだけの能力も野心も持たないため、ただ、著者の専門との関連がある歴史・思想文化などの資料を整理しながら、その問題への関心を喚起するにとどめたい。

ここでまた本稿での文化という意味を少し吟味することにしたい。[2] 文化とは何か、それには従来、何百種類もの定義があると言われている。[3] 本稿では一応、E・タイラー（E. B. Tylor 1832–1917）の定義に従うことにする。「カルチャーまたはシヴィリゼーションとは、

知識、信仰、芸術、法律、慣習その他、社会成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合総体である。[4]」ただ、普通には、それは政治や経済（体制や活動など）と区別されているが、ここで敢えて各学者の具体的論旨に沿って、ある程度それらをも含めるようにしたい。また「文化」と「文明」という言葉がしばしば出てくるが、それぞれ時代や国（例えば英仏はドイツと異なる）によって文脈が違うので、ここでは詳論を控えたい。[3]

本稿では、日本や欧米の学界の議論を整理しながら、中国と日本との文化比較は如何なる歴史的背景のもとで展開され、またどういう形で変化するかについて、大まかに、またなるべく客観的に検討してみたい。したがって中日文化は実際どのように異質か、またどのように近似的であり、さらに同質であるかについては、紙幅の制約で触れないことにする。専門家の皆さんのご批評を乞いたい。

1　近代以降の日中文化異同論

（一）

日本の近世後期、西洋勢力の東漸がいよいよ本格化するにつれて、東アジアの諸国が連盟して抵抗しようとする機運が高まってきた。たとえば、水戸学の代表的思想家の会沢安（やすし）

（一七八二―一八六三）は次のように言っていた。「神州と漢土とは、何れも東に向かひたる地勢にて、朝陽の生気を受け、風土も宜しく、人民も正しければ、其の五典の教えも自ら人情に適ひて、天祖　忠孝の教えに符合す」（『迪彝編』一八四三年刊）[6]。しかし、強大な西洋勢力の前に、東アジア大陸の清国はまずアヘン戦争（一八四〇～四二年）で敗れ、日本もアメリカのペリー艦隊が誇示する軍事力のもと、開国を余儀なくされた。そして、この日清連帯の構想はもろくも崩れた。

明治時代に入ると、その初期に、岩倉具視ら明治新政府の要人と共に世界を遊覧した久米邦武（一八三九―一九三一）が東アジアと欧米とを比較し、次のように東西文化の比較を闊達（かったつ）に行っていた。

白種は情慾の念熾（さか）んに、宗教に熱中し、自ら制御する力乏し、略言すれば慾深き人種なり、黄種は情慾の念薄く、性情を矯揉（きょうじゅう）するに強し、略言すれば、慾少なき人種なり。[7]

○抑（そもそも）西洋人種は、資性元悪なり、慾情の熾なる如く、求福の情も亦熾なり、宗教の旨趣は、其情を導くを主として立言せるものにて、全く東洋性善の教と相反するのみならず、又釈氏善根の説にも反す、[8]

彼は人種論に基づいて東西比較を展開しているが、「東洋」という言葉は明らかに東アジア全体、そして日本と中国を一括りしていたに違いない。

英国に留学した経験があり、洋学者でもあり、儒学者でもある中村正直（一八三二―九一）が東アジアの連帯と共同を唱えて次のように論じている。

> 吾邦の支那に於る、隣国にして、人種も同じく、文字も同じく、千有余の昔より、中古に至るまで礼楽文物、工芸器具、大抵支那朝鮮より輸入し来りし者に非るは無し、儒仏の二教、皆この二国より伝来せる者なり、〔……〕然るに欧米との外交事起り、吾邦に於て、百事彼を師とするに至り、邦人或は自ら支那人の上に在りと幻想し、支那人を卑視するの弊、生じ来りたり、夫れ人を卑視する者は、其人自ら卑きなり、君子は、僮僕に於ても、尚ほ敬す、況や他人をや、縦ひ己より小さき国と雖も、之を卑視するの心、除かざる間は、己文明を去ること遠矣、
>
> 我邦と支那朝鮮とは、同宗一家なり、[9]〔強調原文〕

東アジアにおける一体感や連帯感がよく物語られていると言える。

芸術家の岡倉天心（一八六三―一九一三）の『東洋の理想』（一九〇三年）にある「アジア

は一つである（Asia is one）」という言葉はもちろん、樽井藤吉の『大東合邦論』（一八九三年）もある意味で、幕末から明治初期のおびただしい東アジア連帯論と同じ流れに属していると言えよう。ただその後、日本が軍国主義の風潮に推されて自らをアジアのリーダーや代表として欧米列強と戦い、また最終的に「大東亜共栄圏」に導かれていったので、低く評価されがちである。しかし、その東アジアの文化類似論には、やはり幕末以来、日本、さらに東アジアがいかに欧米に対処してきたかが、常に背景にあるといえる。

（二）

一方、明治前期から、中日文化はもとより違うと主張する学者も現れた。啓蒙学者の福沢諭吉（一八三五―一九〇一）は、実は当初、世界文明の発展段階論的に、西ヨーロッパとアメリカを文明国とし、日本と中国を半開国とし、アフリカやオーストラリアの原住民などを未開国ととらえた。文明のレベルでは日本と中国とは同じく「半開」に属していると認識されたが、しかし、同時に中日両国の文化の違いを次のように論じている。

或人の説に、支那は独裁政府と雖ども尚政府の変革あり、日本は一系万代の風なれば其人民の心も自から固陋ならざる可らずと云ふ者あれども、此説は唯外形の名義に拘

泥して事実を察せざるものなり。〔……〕我日本にても古は神政府の旨を以て一世を支配し、人民の心単一にして、至尊の位は至強の力に合するものとして之を信じて疑はざる者なれば、其心事の一方に偏すること固より支那人に異なる可らず。然るに中古武家の代に至り漸く交際の仕組を破て、至尊必ずしも至強ならず、至強必ずしも至尊ならざるの勢と為り、民心に感ずる所にて至尊の考と至強の考とは自から別にして、恰も胸中に二物を容れて其運動を許したるが如し。既に二物を容れて其運動を許すときは、其間に又一片の道理を雑へざる可らず。故に神政尊崇の考と武力圧制の考と之に雑るに道理の考とを以てして、三者各強弱ありと雖ども一として其権力を専にするを得ず。之を専にするを得ざれば其際に自から自由の気風を生ぜざる可らず。〔……〕之を彼支那人が純然たる独裁の一君を仰ぎ、至尊至強の考を一にして一向の信心に惑溺する者に比すれば同日の論に非ず。此一事に就ては支那人は思想に貧なる者にして日本人は之に富める者なり。支那人は無事にして日本人は多事なり。心事繁多にして思想に富める者は惑溺の心も自から淡泊ならざるを得ず。[10]

結果的に、日本は西洋化を内容とする近代化に向いていたので、その後、福沢はますます「脱亜論」に傾いた。ただ、それは「脱亜」であったから、少なくとも最初の時点では、

まだ「アジア」であった。福沢もそうであったように、当時の多くの日本人にとって、いかに欧米人から、他の遅れているアジア人と同じように認識されることを避けられるか、必死であった。

古典学者の津田左右吉（一八七三―一九六一）は主に当時盛んに宣伝されている「大東亜共栄」への嫌悪により、はっきりと次のように主張している。

> 日本の文化の発達は支那の文物に負ふところが多い。これは疑ふべからざる事実である。〔……〕しかし日本の地勢風土は支那と全く違ひ、日本人が人種言語風俗習慣に於いて支那人と全く異なり、家族制度社会組織統治形態に於いてもまた何等の共通点を有たないのみならず、支那とは遠く隔たつてゐて相互の関係は密接でなかつたから、支那人の造り出した文物を学びつゝ、現実の支那及び支那人とは殆ど交渉することが無くして、独自の生活、独自の歴史を展開し、時がたつとともに次第に独自の文化を創造して来た。それでありながら、知識社会の知識としては、いつの世にも支那の古典から与へられる同じ思想を同じやうに尊び、それをすべての準則としてゐたことはふしぎとすべきである。[11]

しかし、これに沿っていくとどの文化もそれぞれの独自性をもっているのであるから、近似性や共通性がなければ、学問的概括や分類はほとんど不可能に近いのではなかろうか。

（三）

また、明治時代においては、自由経済論の代表的論客であり、歴史家でもある田口卯吉（一八五五―一九〇五）がかつて次のように論じ、東アジアのモンゴル人種が西洋人によってまさに絶滅の道へ追い込まれると警鐘を鳴らしている。

斯く我輩が目して亜細亜の大患と為す所の欧人の唱ふる所を聞くに曰く自由曰く共同。我輩其語の美なるに膝を打て嘆て曰く「嗚呼直なるかな明なるかな欧人の人倫を論ずるや」。既にして其行ふ所を目撃し所謂自由とは自ら自由を望むにして他人を圧制するを咎めず所謂共同とは自ら共同を望むにして他人を圧制するを禁ぜざることを解するに及んで曩日（のうじつ）に膝を打ちしことを悔んたり。蓋（けだ）し欧人は天下無双の悍民なり。若し其言ふ所に惑ひ其行ふ所を顧みざれば我蒙古人種の殄滅（てんめつ）将に米国印度と日を同ふせん。[12]

そして、以下のような発言から、関係者との論戦に巻き込まれた。田口は自分が主宰している『東京経済雑誌』で次のように発言していた。

余輩此頃ろ東京名誉職市参事会員たる何礼之君が何如璋の遠戚にして関直彦君は三国の人傑関羽の子孫なる由を聞けり。夫れ何君は元老院議官にして勅任の栄を有し、関君は日々新聞の記者として秀才の誉を社会に専にする人ならずや。而して我邦にある我邦の栄なり云々。[13]

これに対して、関が自分の祖先のことを述べて反論すると、田口は関の文章に対して更に一文を書いて、弁解した。

余が斯く申し出でしは毛頭「冷かし」など申す主意あるにあらず、我国人の中には支那人の子孫多きことを証し其人は皆な我国を利益せしことを述べんとの主意にて、此外にも数へて見れば副島伯爵の如きも漢の高祖の御遠裔（えんえい）なるべし、盧大蔵書記官の如きも必ず何にか由緒あらん。故人にては頼山陽、長曾我部元親など著明の人にして其祖先は支那人なるべし。[14]

彼は歴史家として、そういう議論を必ずしも厳密に考証しなかった。にもかかわらず、評論家として面白く話題になってくれれば、結構なことだと思っていたかもしれない。

しかし、十九世紀末から二十世紀に入ると、田口本人がそうした論法を変えるようになった。

> 余は日本人種の本体たる天孫人種は一種の優等人種たることを疑はざるなり。此の人種は天の如何なる方面より降りしかは、実に史上の疑問なり、然れども其の言語文法より推断すれば、サンスクリット、ペルシア等と同人種にして、言語学者が称してアリアン語族と云へるものに属するや喋々を要せざる事なり[15]

さらに、「世界の学者は無学なる旅行者の紀行を信用して日本人種は黄色人種とかいろいろ悪評を言ひますが、日本人が自ら我は黄色人種であると是認する必要はない」とまで断言している[16]。それはおそらく福沢諭吉と同じように進化論の強い影響を受けながら、自分の考え方を大きく変えたためと言えよう[17]。

近代日本の発展と清国の衰退があまりにも明確になっている中、菅菊太郎（一八七五―一九五〇）は次のようにはっきり主張している。

大凡日本人種発源の霊界として知られたる高天原なる処は日本人種即ち「アーリヤン」人種を哺育したる所ならば、論理上、欧羅巴人種の祖先国も亦高天原なることを知らざるべからず、是れ欧羅巴人種は日本人種と共に「サンスクリット」（霊界高天原附近の如し）語の語源を有するに徴して、近くはアストン（Aston）氏が日本語はチュラニアン語の特徴を有すと云ひ、更にアキン（Akkin）氏の学説に随ひ日本語と「アーリヤン」語源の類似点を示せるに徴して知ることを得べし、〔……〕

〔……〕著者は本論を著して特に我同胞と共に斯有為民族の抱負を大ならしめ渾面に跳梁するの日あるを俟つもの也、噫呼、日本人種、日本人種は欧羅巴人種と一族にして最有為最高尚の一民族なりし也。[18]

あたかも、萌芽的な帝国主義の風潮に呼応するように、日本人種＝ヨーロッパ人種という論説がここまで展開されるに至っていた。しかし、その時の歴史的文脈を探れば、同類であっても必ずしも友になるとも限らないであろう。

2　第二次世界大戦後の日中文化異同論

（一）

第二次世界大戦以降、大きな転換期の中、最初、東洋という言葉で示される地域と文化を西洋と比較する場合、日本も当然、東洋の一部分として認識された。当時の第一線の学者はほとんど日本を含む東洋的な文化や体制への批判に積極的に参加していた。それは非常に歴史的意義のあることだと認めなければならないが、ただその時、当然ながら、日本もまた中国と一緒に含まれた東洋論やアジア論が盛んに行われていた。

西洋経済史学者の大塚久雄（一九〇七―九六）は次のように論じている。

> ヨウマンたちの農業経営、とりわけ農耕労働においては、土地の生産性が極めて低かったにもかかわらず、その労働の生産性は極めて高かった。すなわち、一定面積における収量は極めて少なかったにもかかわらず、投下された労働の量に対して、収量は著しく高い比率を保っていたのである。[19]

こうしたイギリスとわが国、いっそうおおざっぱにいえば、西洋と東洋の農業生産

力――読者はそれが農業とは限らず生産力一般の問題であることに気づかれるであろう――における「質」の相違は、いったい、世界史のどの段階で、どういう事情から生まれてきたものなのであろうか。〔……〕西洋では、牧畜が原初から大きな比重をもち、そしてあのマルクゲノッセンシャフトを成立せしめるような畑作農業が特徴をなしていたこと、これに対比して、東洋とくにモンスーン地帯では、原初から、低度な農具を用いつつ人間労働を濫費するにいたるような、「水田」耕作へといきなり移行していること、を読者は想起されるであろうが、実はそういうことなのである。[20]

東アジアの稲作農業の類似性から、その中の各国文化の類似性にまで広まっていくことも、ある程度、理解できる。

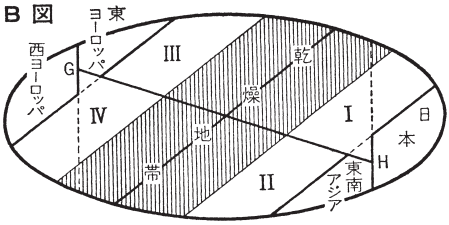
思想史学者の丸山眞男（一九一四―九六）も、次のように述べている。

いわゆる空虚な観念的思弁を忌み、実践生活〔……〕に学問が奉仕すべき事を求めるのは日本人の観念生活に於ける伝統的態度だといっていい。いなむしろ、実践的必要から切り離された理論的完結性に対して無関心なのは東洋的学問の特色とさえ言われている。[21]

その時代の雰囲気から見ると、当然、いわゆる西洋中心主義的な考え方、そしてアジア文化類似論は根強く存在していたに違いない。

もちろん、その時期にも、近代日本の挫折を前提にして、かえって中国革命を高く評価する中国文学研究者竹内好（一九一〇―七七）なども現れてきた。しかし、良い面においても、悪い面においても、基本的に日本も中国も同じ東アジア文化の中にあるという認識は、ある意味で共通していたと言ってよかろう。

B 図



梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論社，1967 年）

（二）

しかし、戦後日本は経済復興と高度成長を遂げつつあり、日本近代化への見直しが進行する中で、いよいよ日中異質論が徐々に浮上してきた。しかしその多くは、日本と西洋との類似性を中心に論じられた。例えば、人類学者の梅棹忠夫（一九二〇―二〇一〇）などによって、日本文化は西洋に類似し、また並行するものだと主張されるようになった。梅棹によれば、ユーラシア大陸の右側にある日本は、その左側にある西欧と同じ「第一地域」に入れられ、大陸中心部の帝国、いわゆる第二地域とは別に区分

される。そして、その中核部乾燥地の遊牧民地域が文明の存廃の核心として捉えられていた。

乾燥地帯は悪魔の巣だ。乾燥地帯のまんなかからあらわれてくる人間の集団は、どうしてあれほどはげしい破壊力をしめすことができるのであろうか。〔……〕とにかく、昔から、何べんでも、ものすごく無茶苦茶な連中が、この乾燥地帯からでてきて、文明の世界を嵐のようにふきぬけていった。そのあと、文明はしばしばいやすことのむつかしい打撃をうける。

〔……〕

第二地域の歴史は、だいたいにおいて、破壊と征服の歴史である。王朝は、暴力を有効に排除しえたときだけ、うまくさかえる。その場合も、いつおそいかかってくるかもしれないあたらしい暴力に対して、いつも身がまえていなければならない。それはおびただしい生産力の浪費ではなかったか。

たいへん単純化してしまったようだが、第二地域の特殊性は、けっきょくこれだとおもう。建設と破壊のたえざるくりかえし、そこでは、一時はりっぱな社会をつくることができても、その内部矛盾がたかまってあたらしい革命的展開にいたるまでは成

熟することができない。もともと、そういう条件の土地なのだった。[22]

経済学者の川勝平太氏（一九四八―　）の海洋史観も梅棹氏の観点を継承しながら、それを経済史的に実証し、理論化する一つの試みと見なされてよいであろう。かなり説得力があるが、しかし、総じて言えば、そこでは生態環境や経済が中心となり、文化の香りはあまりしない。筆者から見れば、少なくとも鍵となる「勤勉革命」も、その背景には近世中期からの儒教的世俗道徳論がなくては語れないのではなかろうか。[23]

（三）

一方、東洋と西洋という概念は分解されると同時に、また、国家単位の文化論もある程度弱くなってきた。仏教学者の中村元（一九一二―九九）は次のように論じている。

従来、日本においては東洋と西洋とを対蹠的に考える傾向があり、たがいに相い対立する二つの価値概念のうちの一方を東洋に、他方を西洋に配当するという図式的な解決法が、ひろく行われていた。たとえば、前者には精神的、内面的、総合的、主体的などの観念があてはめられ、後者には物質的、外面的、分析的、客体的などの観念が

配当されていた。〔……〕しかしながら東洋あるいは西洋という観念は、じつは意義内容のはなはだ漠然としたものであって、その内容をつきつめて検討してみるならば、両者はそれぞれ、より小さい単位から構成されているという事実に直面せざるを得ない。[24]

それは抽象的で漠然たる東西文化比較への、一種の疑問と見て良かろう。

そして、宗教学者の福井文雅氏（一九三四―二〇一七）が「東西南北などの「方角」は地理上の区分原理でありこそすれ、決して思想や文化の区分原理とは成り得ないからである。方角の違いと思想の違いとは合致していないし、その間の境界は曖昧である。交流が盛んであればあるほど、なおさら合致しなくなる」[25]と論じているが、日本では大変流行していた風土論へのアンチテーゼになるのではなかろうか。

多くの日本の学者は、重要な事項や地域的、文化的な特別事項を通じて比較研究を行うようになってきた（たとえタイトルは西洋や東洋であったにしても）。川勝平太氏は中国の文化の特徴は「北馬南船」、いっぽう、日本の文化のそれは「東馬西船」と論じているが、[26]国より、地域とその文化の特殊性や個別性はより重要な鍵となる。そう言えば、どこの国や地域でもそれぞれ独自の要素をもっており、互いに競争して、また融合したりしている。そして、国やもっと大きな地域を単位とする比較文化はまったく無意味ではないが、実際

かなり強引で、一部の特徴を拡大し全体を代表させる欠点がどうしても避けがたい。

しかし、壮大な東西文化の比較が薄くなってきたところで、日本文化の特殊性を強調する研究成果も次々と出てきた。青木保氏はそれを「肯定的特殊性」ととらえ、「日本文化論」の「黄金期」と見ていたが、[27] ただその間、日本文化は西洋と東洋のどちらにも似ていないという見方が主流となった成果も多く出てきた。社会人類学者の中根千枝（一九二六―　）は『家族の構造――社会人類学的分析』（東京大学出版会、一九七〇年）などの著作で、文化比較の枠組みを、社会の最も基本的な集団すなわち家の経営や相続の形式を中心に、「西洋的核家庭型」、「アジア的大家庭型」、「直系家庭型」と三種類に分けて、日本家族の直系家庭型としての特質や内部構造を際立てた。その後、直系型日本家族説から日本社会集団の特質へと論及していった。[28]

その場合、結果的に日本は東洋とも違うし、また西洋とも違うという意味での日本特殊論が浮上することになった。[29] どの文化も特殊性をもちながら、ほかの文化との類似性やさらに普遍性というものも内在的に存在するはずである。問題はどういう方法や視角で探求していくかというところにある。それは引き続き各分野の学者にとって、これからの課題になるであろう。

3　欧米の中日文化異同論

（一）

東アジア文明については、欧米の学者の共通的な見方としては大体、イギリスの著名な歴史家のトインビー（Arnold Joseph Toynbee, 1889–1975）の『歴史の研究』（*A Study of History*, 1934）の中で論じられているものに近似し、日本文明は、朝鮮、ベトナムと同様に中国文明からの啓発を受けて、独自のルートで発展してきたものであり、中国文明の「衛星文明」であった。すなわち、同じく東アジア文化圏に属していると考えられているに違いなかろう。[30]

そして、第二次世界大戦後、アメリカの人類学者ルース・ベネディクト（Ruth Benedict, 1887–1948）の有名な『菊と刀』（*The Chrysanthemum and the Sword*, 1946）は、今でも日本文化研究の古典と言って過言ではなかろう。その中で、ベネディクトは必ずしも中国文化と日本文化との比較を行ってはいなかったが、しかし、彼女の有名な「恥の文化」と「罪の文化」との比較においては、一神教のキリスト教と多神教（また汎神教）とが区別して論じられていたので、当然、中国文化を含む非一神教文化も「恥の文化」の分類に入れられるわけである。

ルース・ベネディクトは「真の罪の文化が内面的な罪の自覚に基づいて善行を行なうの

に対して、真の恥の文化は外面的強制力に基づいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である」[31]と論じていたが、そこでは明らかに「罪の文化」と「恥の文化」の優劣の価値判断が行われていた。ただ、ここで詳しく論及はしないが、彼女の理論は、実は日本の中国学者の中国認識にも大きな影響を与えていたことだけを指摘したい。中国思想学者の森三樹三郎は、「実は中国は我国よりも一層強く「恥の文化」の傾向を持っているのでありまして、「恥の文化」の本場はむしろ中国であるといってよいのであります」[32]とはっきり主張したわけである。

欧米の学界において、中日の異同はどう考えられていたか。また、アメリカの屈指の日本通で、日本歴史の専門家でもあったライシャワー（Edwin Oldfather Reischauer, 1910–1990）の論説を考察しよう。彼はかつて、『日本近代の新しい見方』（一九六五年）で伝統社会体制という視点から日本の封建制と中国の中央集権的郡県制など歴史的体制の違いを鋭く指摘していたが、しかし、それと同時に、前近代と近代以降の日本文化への中国伝統文化の影響を見逃していない。一九七七年の著書『ザ・ジャパニーズ』（*The Japanese*）では次のように述べている。

現代の日本人は、徳川時代の先人とは異なり、明らかに「孔孟の徒」ではない。だ

が、彼等の価値観や倫理観は未だに儒教的なものを色濃く残している。伝統的な哲学や宗教の中で、儒教ほど大きな影響を残しているものは、おそらく他にはあるまい。

日本人が全幅の信頼を自然科学、進歩と成長という現代的な理念、普遍的な倫理基準、それに民主的な理念や価値に寄せている背後には、儒教的な筋が通っており、それが未だに見え隠れしている。政治とは道義に基礎をおくべきだとする信条、対人関係や人間的誠実の重視、教育や勤勉への信頼などが、その具体的な項目である。

今日、「孔孟の徒」を自認する日本人は殆ど皆無だが、ある意味では一億みな「孔孟の徒」と言えなくもないのである。[33]

また、ライシャワーは、十数年を経た後の同書の改訂版（*The Japanese Today*, 1989）においても、次のように論じた。

明らかに現代の日本人は徳川時代の祖先と違って儒教信者ではありません。しかし、儒教倫理の価値観は、日本人の思考様式の中に深く浸みこんでいます。儒教は多分他のいかなる伝統的な宗教や哲学よりも日本人に大きな影響を与えてきたでしょう。日本人は近代科学、進歩と成長に関する現代思想、普遍主義的な倫理原則、民主的理念

や価値を全面的に受け入れていますが、その背景には、政治とは道徳に基づくものだという信条や、個人間の人間関係や誠実さを大切にすべきだという考えや、教育と勤勉が大切だという信条など、儒教的性向が根を張っています。今日では、自分自身を儒教信者であると考える日本人はほとんどいませんが、しかし、ある意味ではほとんどすべての日本人が儒教信者だと言えるのです。[34]

ライシャワーは日中歴史の違いをよく知っていたはずだが、しかし、動態的にそれをとらえていた。ただ、その結論がどれほど日本人の共感を呼べるか、はなはだ疑わしい。

中国科学技術史の専門家で、またアジアの道教、仏教、儒教にも精通しているイギリスの著名な学者ジョゼフ・ニーダム（Noel Joseph Terence Montgomery Needham, 1900–1995）も、かつて日本を訪問する中で次のように発言していた。

日本の資本主義は、西洋の資本主義と、その意味で随分違っているのではないかと思います。何かそこに、儒教的なものが特徴として入っているのではないか。と言いますのも、日本では、事業主の仕事・事業をする目的が、しばしば、自分の利益追求というよりも、従業員になるべく安定した仕事を与えたいということにある。これは、

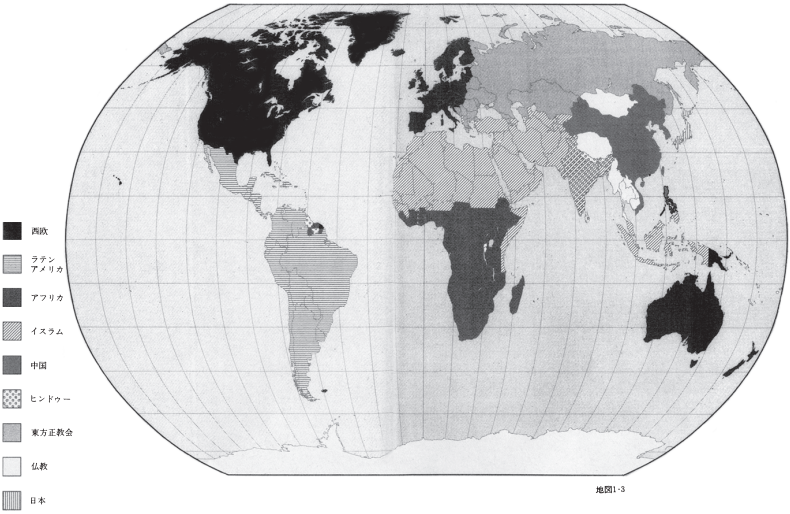
まさしく儒教的なもので、面倒を見てあげなければいけないというのが目的になっているということです。[35]

ニーダムが日本についてどれほど知っているかよく分からないが、しかし彼ほどの中国通にそう言われれば、容易く否定できないかもしれない。ともかく、ヨーロッパの知識人や学者から見れば、東アジアの各国と各地域には、欧米と違う、ある種の近似性があるとの認識は、少なくともその段階では自明ではなかろうか。

（二）

しかし、一九九〇年代以降、アメリカの国際政治学者フランシス・フクヤマ（Francis Fukuyama, 1952–）がソ連とその同盟国の崩壊をうけて、自由民主主義が最終的勝利を迎えようとする段階に至っているという「歴史の終わり」を提唱し、[36]世界で「反文化相対主義」が一世を風靡すると、ハーバード大学の国際政治学者ハンチントン（Samuel P. Huntington, 1927–2008）は、各文化やアイデンティティには、外部者に対する敵対行動の原理が内在していると明らかにし、「文明の衝突」論（*The Crash of Civilization and Remaking of World Order*, 1996）を主張した。[37]

さまざまな文明からなる世界(1990年以後)



ハンチントン『文明の衝突』（集英社，1998 年）より

今後の世界は七つ、あるいは八つの主要な文明間の関係によって規定されていくことになるだろう。この主要な文明とは、西欧文明、儒教文明、日本文明、イスラム文明、ヒンズー文明、スラブ文明、ラテンアメリカ文明であるが、これにアフリカ文明を加えることもできるかもしれない。今後の紛争は、こうした諸文明を隔てる文化的な断層ラインに沿って引き起こされるだろう。[38]

彼の理論において、今まで東アジア文明を構成していた中国文化と日本文化はそれぞれ違う文明に分けられた。しかし、いったい、日本文明と東アジア文明とがどう違っているかについては、あまり分析されなかったようである。ただ、日本文化の特徴を、アメリカとの比較で「個人主義と集団主義、平等主義と階級制、自由と権威、契約と血族関係、罪と恥、権利と義務、普遍主義と排他主義、競争と協調、異質性と同質性」といった側面から指摘している。これらの相違点は文化的には収斂（しゅうれん）されつつあるが、その差異は今でも存在するという。[39] しかし、日本文化が東アジアの文化とどれほど違うかについては、ほとんど不問に付されていた。したがって、基本的に現在、国際情勢の中で、日本が西側に属しているところにだけ目を据えている、アメリカの世界戦略に基づいた議論と言ってよかろう。

注意すべき点は、ハンチントンが次のように決めつけ、冷徹な目で見ていたことである。

私の思うに、アメリカ人は、日本人の考え方と行動を理解するのにまだ困難を感じ、他のどの国の国民よりも日本人とのコミュニケーションをとるのが難しいと思っている。そのために、アメリカと日本との関係は、アメリカがヨーロッパの同盟国とのあいだで築いているような、打ち解けた、思いやりのある親しいものであったことはないし、これからもそういう関係が築けるとは考えにくい。[40]

〔日本は〕他の国との間に文化的つながりがない〔……〕日本は、なんらかの危機に見舞われた場合、日本に文化的なアイデンティティを感じるという理由で、他の国が結集して支援してくれることを当てにできない。一方で、他の社会と文化的なつながりがないために、他のいかなる国に対しても文化的な共通性にもとづいて支援をする責任がなく、したがって、自国の独自の権益を思うがままに追及できる。[41]

ただ、ハンチントンのこれらの見方は、おそらく八〇年代以降、欧米学者らが「日本特殊

論」を批判していた材料を参考にしていたかもしれない。[42]

ハンチントンの文明の衝突の理論に対して、中根千枝氏が次のように批判している。

> 彼〔ハンチントン〕はアジアの文化、文明については詳しくありません。第一、アジアではヒンドゥ教、仏教、儒教、そしてキリスト教、イスラム教までも、共生してきたわけで、衝突はしていないんです。〔……〕それから「衝突」とか「対立」「対決」というのは、西欧人がとても好きな言葉なんです。アジアにもそういう概念はありますが、好んで用いられることはない。かえって「融合」とか「共生」という方向に特色があります。[43]

今までのアジアの歴史から見れば、すべてそうではなくてもかなりの部分は的中しているが、これからそうなってくれれば、もちろん、はなはだ望ましい。

おわりに

実は、東アジア文化圏の経済発展について、かなり楽観的に見ている欧米の学者がいる。

フランスの学者レオン・ヴァンデルメールシュ（Léon Vandermeersch, 1928–）は『アジア文化圏の時代』（*Le nouveau monde sinisé*, 1986）で、日本から始まるその過程を漢字文化圏の視角からとらえた。[44]

その後、ドイツ人経済学者フランク（Andre Gunder Frank, 1929–2005）は『リオリエント』（*Reorient: Global Economy in the Asian Age*, 1998）で、今までの歴史理論を西洋中心史観として厳しく批判し、中国とインドを中心とする近世の世界経済発展の壮大な歴史を鮮やかに描いた。[45]

日本の中国思想史学者の溝口雄三氏の『中国の衝撃』（二〇〇四年）も、より中国の現状を見つめダイナミックにその発展の核心と道筋に迫っていた。

> われわれにとっての〝中国の衝撃〟は、優劣の歴史観から我々を目覚めさせ、多元的な歴史観を我々に必須とさせ、今後関係が深まるがゆえにかえって激化するであろう両国間の矛盾や衝突の中に、「共同」の種を植え付けさせるものでなければならない。[46]

筆者の理解では、ここでの「共同」というのは共存／共同繁栄ということだと思うが、しかし、「異」を無視したり、排斥したりするのではなく、その「異」を認識し、互いに理

解しあった上での「共同」であるものであろう。[47]

中国と日本は、両方ともに地理的に東アジアに属しており、また文化的にかなり多くの共通点を持っていると言える。現実に大きな問題を抱えているにしても、これからも経済的協力は続き、また文化的交流も続いていく中で新生面を開くであろう。もちろん、心情的、政治的には、双方の間にかなりの隔たりがあるのも厳然たる事実であるが、しかし、長い歴史の目で見れば、おそらく一瞬の間に過ぎない。現在、東アジア共同体を言わなくても、東アジア文化と欧米文化との比較を積極的に行い、将来への豊かな可能性を醸し出すことは、決して無意味ではなかろう。[48]そして、引き続き、文化的に、日本文化がアジア文化の一員となるか、欧米文化の一員となるか、あるいはアジアでも欧米でもない特殊なものとなるか、まさしく自他ともに問われていくことになるのではなかろうか。

（完）

注

（1）例えば、酒井直樹「ポスト・コロニアルな条件と日本研究の将来――「失われた二十年」と帝国の喪失」（『日本研究』第五三集、国際日本文化研究センター、二〇一六年）、落合恵美子「日本研究をグローバルな視野に埋め直す――「日本」と「アジア」の再定義」（『日本研究』第五五集、二〇一七年）、藤田昌志「「日本文化論」の研究――明治以前・明治・大正」（『三重大学国際交流センター紀要』第一二号、二〇一六年）などである。

（2）現在の中日両国とも、「文化」という漢語は、英・仏語 culture、あるいはドイツ語 Kultur などの訳である。欧語はいずれもラテン語 cultura に由来し、元来〈栽培・耕作〉の意をもつ。すなわち、動物のあり方とは区別されるところのもので、また自然とも対比される。

（3）欧米の学者によると、その定義の数は一六四もあるという。A. L. Kroeber and Clyde Kluckhohn, *Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions*, Cambridge: The Museum, 1952.

（4）E・B・タイラー『原始文化――神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』（一八七一年）比屋根安定訳、誠信書房、一九六二年。

（5）具体的には伊東俊太郎『比較文明』（東京大学出版会、一九八五年）の第一章「文化と文明」を参照されたい。

（6）会沢安『迪彝編』（一八四三年刊）、高須芳次郎編『水戸学全集』第二編『会沢正志集』（日東書院、一九三三年）所収、三五五頁。

（7）久米邦武編『特命全権大使　米欧回覧実記（五）』（博聞社、一八七八年刊）岩波文庫、一九八二年、

一四九頁。以下、読者の便を鑑み、カタカナをひらがなに変え、適宜濁点を補った。

（8）同書、一五五頁。

（9）中村正直「漢学不可廃論」（一八八七年）、『明治啓蒙思想集』明治文学全集3（筑摩書房、一九六七年）所収、三二四頁。

（10）福沢諭吉『文明論之概略』（一八七五年）、『福沢諭吉全集』第四巻（岩波書店、一九七〇年）所収、二五―二六頁。

（11）津田左右吉『支那思想と日本』岩波書店、一九三七年、九八―九九頁。

（12）「合従新論」第一、『郵便報知新聞』明治八年六月十八日、筆名：黄東山樵。

（13）田口卯吉「内地雑居杞憂」『東京経済雑誌』第四七八号、明治二十二年七月十三日。

（14）田口卯吉「大正誤」『東京経済雑誌』第四八〇号、明治二十二年七月二十七日。

（15）田口卯吉『破黄禍論』（明治三十七年）、『鼎軒田口卯吉全集』第二巻（吉川弘文館、昭和二年）所収、四九七頁。

（16）同書、五一四頁。

（17）ひろたまさき『福沢諭吉研究』（東京大学出版会、一九七六年）、安西敏三『福沢諭吉と西欧思想』（名古屋大学出版社、一九九五年）など参照。

（18）菅菊太郎『日欧交通起源史』裳華書房、明治三十年、二四―二五頁。

（19）大塚久雄「生産力における東洋と西洋」、『大塚久雄著作集』第七巻、岩波書店、一九六九年、二五三頁。

（20）同書、二五五頁

（21）丸山眞男「福沢に於ける「実学」の転回――福沢諭吉の哲学研究序説」（『東洋文化研究』第三号、日光

書院、一九四七年）、『丸山眞男集』第三巻（岩波書店、一九九五年）所収、一一一―一一二頁。

（22）梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、一九六七年、九五頁（初出『中央公論』一九五七年二月号）。

（23）中国でのそれとはかなり違っても、無関係ではない。安丸良夫の「通俗倫理」についての論説、渡辺浩『日本政治思想史――十七～十九世紀』（東京大学出版会、二〇一〇年）など参照されたい。筆者も日本近世封建制の緩やかな崩壊と儒教の普及との関連性について「天下公共と封建郡県論――東アジアの思想連鎖における伝統中国と近世日本」（張翔・園田英弘編『「封建」・「郡県」再考――東アジア社会体制論の深層』思文閣、二〇〇六年）の中で少しく触れた。

（24）中村元「序論」、『東洋人の思惟方法　第一』『中村元選集』第一巻（春秋社、一九六一年）所収、五頁。

（25）福井文雅『欧米の東洋学と比較論』隆文館、一九九一年、三七二―七三頁。

（26）川勝平太『文明の海洋史観』（中央公論社、一九九七年）を参照されたい。

（27）青木保『「日本文化論」の変容』第五章（中央公論社、一九九〇年）を参照されたい。

（28）中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社、一九六七年）、『タテ社会の力学』（講談社、一九七八年）など。

（29）例えば、全部ではないが、大石慎三郎、中根千枝ほか『江戸時代と近代化』（筑摩書店、一九八六年）のうち、いくつか論文には日本特殊論がよく現れていると思われる。

（30）A・J・トインビー『歴史の研究』第一巻（序論）（下島連等訳、「歴史の研究」刊行会、一九六六年）を参照されたい。

（31）ルース・ベネディクト『菊と刀――日本文化の型』長谷川松治訳、社会思想社、一九六七年、二五八頁。

（32）森三樹三郎『中国文化と日本文化』人文書院、一九八八年、四〇頁。

(33) エドウィン・O・ライシャワー『ザ・ジャパニーズ』國弘正雄訳、文藝春秋社、一九七九年、二二〇頁。
(34) エドウィン・O・ライシャワー『ザ・ジャパニーズ・トゥディ』福島正光訳、文藝春秋社、一九九〇年、二五八頁。
(35) 中山茂ほか編『ジョゼフ・ニーダムの世界——名誉道士(タオイスト)の生と思想』日本地域社会研究所、一九八八年、九七頁。
(36) 最初、フクヤマは「歴史の終わり?」(The End of History?) というタイトルの論文を『ナショナル・インタレスト』誌 (*The National Interest*) 一九八九年夏号で発表。後『歴史の終わり』(*The End of History and the Last Man*, 1992) を出版した。
(37) 最初に「文明の衝突?」(The Clash of Civilizations?) という論文が『フォーリンアフェアーズ』誌 (*Foreign Affairs*) 一九九三年七月号に掲載された。
(38) サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳、集英社、一九九八年。
(39) サミュエル・ハンチントン『文明の衝突と21世紀の日本』鈴木主税訳、集英社新書、二〇〇〇年、四七頁。本書は、一九九八年十二月に東京で行った講演「二十一世紀における日本の選択——世界政治の再編成」と、『フォーリン・アフェアーズ』誌一九九九年三・四月号掲載の論文「孤独な超大国」、及びハンチントンの前著『文明の衝突』の抜粋を収録している。
(40) 同書、四七—四八頁。
(41) 同書、四八—四九頁。
(42) それについて、青木保『「日本文化論」の変容』(前掲書) 第六章「特殊から普遍へ」を参照されたい。
(43) 鈴木治雄編『現代「文明」の研究——普遍的価値の絆を求めて』朝日ソノラマ、一九九九年、二一—

二二頁。

（44）レオン・ヴァンデルメールシュ『アジア文化圏の時代――政治・経済・文化の新たなる担い手』（福鎌忠恕訳、大修館、一九八七年）参照。

（45）アンドレ・グンダー・フランク『リオリエント――アジア時代のグローバル・エコノミー』（山下範久訳、藤原書店、二〇〇〇年）参照。

（46）溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会、二〇〇四年、一七頁。

（47）アメリカでも、近代化論の相対主義的認識もかなり進んでいると、三谷博「マリウス・B・ジャンセン――日本の発見と比較研究」という論文からよく分かる。同氏『明治維新を考える』（岩波書店、二〇一二年）を参照されたい。

（48）張翔「東亜文化圏的共通性要素：地理・人種・文字・思想文化等諸要素的試析」（胡令遠他主編『東亜文明：共振与更生』復旦大学出版社、二〇一三年）も参照されたい。

発表を終えて

二〇一三年早春、日文研フォーラムの催事として京都ハートピアの大会議室で市民の皆様に対し「中日文化異同論の推移――近代以降の日本と欧米の学界を中心に」というスピーチをする運びとなり、伊東貴之教授の司会で穏やかに行われた。その後、会場からの質問に答えるため、時間をある程度オーバーしたにもかかわらず、皆様が興味津々（多分？）で聞いてくださり、誰一人も早く出て帰られなかったのは感激だった。そして後日、日文研のスタッフを通じて聴衆から多くの質問や励ましの言葉をいただいた。驚き感心したのは、この頃、中日関係は必ずしもよろしくないが、皆様からのメッセージはかなり好意的で、また客観的で多元的なものであったことだ。そして、今回も含めて日文研の先生たち、スタッフの皆様にいろいろとお世話になっており、心より感謝の意を表したい。

実は二〇〇三年、最初に日文研へ行くまでに、東京大学社会科学研究所、法学部、文学部、また京都大学人文科学研究所の客員研究員としてお世話になったことがある。いずれも世界屈指の、すばらしい研究・教育機関に違いないが、正直に言うと、その中にいる外国人研究者はある意味で暫時的で異質な存在に過ぎない。しかし、日文研では、外国人の研究者は常時的、構造的な存在だという印象を日文研に来た者みんなが持っているに違いない。

日文研の素晴らしさは、各国の学者たちに互いに討議ができる場を提供してくれるというところにある。日本の学者ばかりでなく欧米やアジアなどの学者たちとも日本語で話し合っていたのはある意味で奇妙な光景であろうし、そしてその場合、日本文化の研究はメインテーマに違いないが、それと同時に、各国の文化、生活や研究体制などにも話が広まっていく。即ち、日本文化研究だけでなく、日本文化研究を通じて諸文化の交流や対話も実にその中に含まれているわけである。これからも更に、日本文化研究が世界に理解可能な、参考可能な、また世界各地の文化の比較研究にも役に立つものになるよう、皆様とともに頑張るつもりである。

二〇一七年夏、上海にて　　張 翔　張翔

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
264	13.2.12	張 翔　ZHANG Xiang 中日文化異同論の推移──近代以降の日本と欧米の学界を中心に	18.3.30
268	13.6.11	魯 成煥　NO Sung hwan 耳塚の「霊魂」をどう考えるか	13.10.31
275	14.2.12	唐 権　TANG Quan 『吾妻鏡（ウチジン）』の謎──清朝へ渡った明治の性科学	14.9.26
276	14.3.11	高馬 京子／ハラルド フース／深井 晃子 KŌMA Kyōko / Harald FUESS / FUKAI Akiko めぐりめぐる日本文化	14.8.29
284	14.12.12	アンドリュー・ガーストル／矢野明子／石上阿希 Andrew GERSTLE / YANO Akiko / ISHIGAMI Aki 大英博物館「春画展」報告	18.2.28
290	15.6.11	朴 正一　PARK Jungil 火の女神と神になった男──16 世紀の井戸茶碗を中心に	18.2.28
301	16.6.14	グエン ヴー クイン ニュー　NGUYEN Vu Quynh Nhu 「古くて新しいもの」──ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る	17.6.30
305	16.11.15	山崎 佳代子　YAMASAKI Kayoko セルビア・アヴァンギャルド詩と『日本の古歌』	17.9.29

235	2010.6.8	ジェフリー アングルス　Jeffrey ANGLES 「訳する」とはどういうことか？――翻訳を歴史的現象として考える	10.10.8
238	10.10.12	根川幸男　Sachio NEGAWA 海を渡った日本の教育――戦前期ブラジルにおける日本的教育文化の越境と再創	10.12.28
240	10.12.14	ローマン ローゼンバウム　Roman ROSENBAUM 小田実の思想と文学――全体小説を短編で書くこと	11.3.31
241	11.1.18	アイーダ スレイメノヴァ　Aida SULEYMENOVA 亡命ロシア人が見た近代日本	11.3.31
252	12.1.17	グエン ティ オワイン　NGUYEN Thi Oanh ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る	12.9.20
253	12.2.14	劉 克申　LIU Keshen 天寿の域にいたる道――貝原益軒の『養生訓』を中心に	12.6.15
254	12.3.13	楊 暁捷　X. Jie YANG 帝誅しと帝諫めの物語――狩野重信筆「帝鑑図・咸陽宮図屏風」を読む	12.6.28
255	12.4.10	都 珍淳／馬 暁華／松田利彦 DOH Jin-Soon / MA Xiaohua / MATSUDA Toshihiko 東アジア近代史における「記憶と記念」	12.11.22
256	12.5.15	徐 興慶　SHYU Shing ching 近代日中知識人の自他認識――思想交流史からのアプローチ	13.1.31
257	12.6.12	アンドリヤナ ツヴェトコビッチ　Andrijana CVETKOVIK 日本映画に於ける原型的な表現方法	13.5.31
259	12.9.11	金 哲会　JIN Zhehui 中国文化への誘い――漢字からのアプローチ	13.2.28
263	13.1.15	クラティラカ・クマーラシンハ Kulatilaka KUMARASINGHE スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇の影響について	13.7.31

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
203	07.6.13	チャワーリン・サウェッタナン　Chavalin SVETANANT 「気」の思想・「こころ」の文化──言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	07.10.1
204	07.7.25	シンシア・ネリ・ザヤス　Cynthia Neri ZAYAS 淡路島における災害と記憶の文化──荒神信仰を中心に	07.12.28
208	07.12.12	王 維坤　WANG Weikun 中国出土の文物からみた中日古代文化交流史──和同開珎と井真成墓誌を中心として	08.7.1
212	08.4.23	周 見　ZHOU Jian 渋沢栄一と張謇──日中近代企業家に関する一つの比較	08.7.15
214	08.6.11	フレデリック ジラール　Frédéric GIRARD ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ──エミール ギメと日本の僧侶、神主との問答	10.9.30
215	08.7.9	アレキサンダー・ヴォヴィン　Alexander VOVIN 萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布	09.3.12
216	08.9.11	金 弼東　KIM Pil Dong 韓国における日本研究が語るもの	08.11.10
218	08.11.12	ジェームズ・バスキンド　James BASKIND 日本における禅浄双修──黄檗宗を中心として	09.1.30
226	09.9.8	野原 博淳　NOHARA Hiroatsu 日本の技術者とフランスの技術者──技術革新の担い手	10.2.15
228	09.11.16	ファム ティ トゥ ザン　PHAM Thi Thu Giang 世俗化から見た近代仏教──日本とベトナムとの比較	10.2.22
232	10.3.9	趙 維平　ZHAO Weiping 東アジアにおける雅楽の流れ	10.6.21

179	05.4.12	ノエル・ジョン・ピニングトン　Noel John PINNINGTON 中世能楽論における「道」の概念――能役者が歩むべき「道」	05.9.1
182	05.7.12	鄭 在貞　CHUNG Jae Jeong 韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み	06.1.20
190	06.4.18	金 容儀　KIM Yongui 玄界灘を渡った鬼のイメージ――なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか	06.10.2
193	06.7.11	周 維宏　ZHOU Wei Hong 近代化による農村の変貌とその捉え方について――中日農村を比較して	06.11.1
194	06.9.19	ダリア・シュバンバリーテ　Dalia ŠVAMBARYTĖ オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって	07.2.1
195	06.10.10	エドウイーナ・パーマー　Edwina PALMER ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」――高等教育の社会科カリキュラムを中心に	06.12.25
196	06.11.14	ヨセフ・キブルツ　Josef A. KYBURZ お札が語る日本人の神仏信仰	07.5.20
198	07.1.16	プラット・アブラハム・ジョージ Pullattu Abraham GEORGE 日印関係とインドにおける日本研究――宮沢賢治の菜食主義の思想	07.4.20
200	07.3.13	陸 留弟　LU Liu Di 楽しみの茶と嗜みの茶――中国から見た茶の湯文化	07.6.1
201	07.4.18	モハメッド レザ・サルカール アラニ Mohammad Reza SARKAR ARANI 国境を越えた日本の学校文化	07.7.10
202	07.5.16	張 哲俊　ZHANG Zhe Jun 唐代文学における日本のイメージ	09.8.14

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
151	02.6.11	魯 義　LU Yi 中日関係と相互理解	02.12.25
153	02.9.10	李 美林　YEE Milim 近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴──日韓比較	05.2.28
155	02.11.5	金 文吉　KIM Moon Gil 神代文字と日本キリスト教──国学運動と国字改良	03.12.26
160	03.4.8	ビル・スウェル　Bill SEWELL 旧満州における戦前日本の町づくり活動	03.11.10
165	03.10.14	王 成　WANG Cheng 阿部知二が描いた“北京”	04.9.30
166	03.11.11	陳 暉　CHEN Hui 明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響──家族改革をめぐって	04.9.30
169	04.5.11	コンスタンティン・ノミコス・ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS 参勤交代と日本の文化	04.10.15
170	04.6.8	王 述坤　WANG Shukun 近代における日本、中国の文人・作家の自殺	04.10.15
171	04.7.13	ヴィクター・ヴィクトロヴィッチ・リビン Victor Victorovich RYBIN 知られざる歌麿──「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析	04.12.15
177	05.2.8	マッツ・アーネ・カールソン　Mats Arne KARLSSON 僕はこの暗号を不気味に思ひ…──芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気	05.8.1
178	05.3.8	呉 咏梅　WU Yongmei アジアにおけるメディア文化の交通──中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって	06.1.20

130	00.6.13	ケネス リチャード　Kenneth L. RICHARD 出島－長崎－日本－世界　憧憬の旅──サダキチ・ハルトマン（1867-1944）と倉場富三郎（1871-1945）	00.12.22
132	00.9.12	マーク・メリ　Mark MELI 「物のあはれ」とは何なのか	01.3.1
134	00.11.14	辛 容泰　SHIN Yong-tae 日本語の「カゲ（光・蔭）」外──日本文化のルーツを探る	01.9.1
136	01.2.6	バルト・ガーンス　Bart GAENS 長者の山──近世的経営の日欧比較	02.9.30
138	01.4.10	李　卓　LI Zhuo 中日姓名の比較について──親族の血縁性と社会性	01.9.1
139	01.5.8	エッケハルト・マイ　Ekkehard MAY 西洋における俳句の新しい受容へ	01.10.15
140	01.6.12	徐 蘇斌　XU Subin 中国現代建築の成立基盤──留日建築家・趙冬日と人民大会堂	02.9.30
142	01.9.18	ジョナサン・オーガスティン　Jonathan M. AUGUSTINE 聖人伝、高僧伝と社会事業──古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に	01.12.25
145	01.12.11	チグサ・キムラ・スティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN 大庭みな子「三匹の蟹」──ミニスカート文化の中の女と男	05.3.31
146	02.1.15	申 昌浩　SHIN Chang Ho 親日仏教と韓国社会	03.1.31
147	02.2.12	マシミリアーノ・トマシ　Massimiliano TOMASI 近代詩における擬声語について	03.3.31
150	02.5.14	李 光濬　LEE Kwang Joon 禅心理学的生命観──人間の生命現象を中心に	04.12.15

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
116	99.3.16	エドウィン A. クランストン Edwin Augustus CRANSTON うたの色々――翻訳は詩歌の詩化または死化？	00.3.1
117	99.4.13	ウィリアム J. タイラー　William J. TYLER 石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について	00.3.1
118	99.5.11	金 知見　KIM Ji Kyun 内藤湖南先生の真蹟――高麗太祖顯陵詩について	00.7.14
120	99.7.13	リース 幸子 滝　REECE Sachiko Taki 心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力	00.3.1
121	99.9.7	宋 敏　SONG Min 明治初期における朝鮮修信使の日本見聞	00.3.31
122	99.10.12	ジャン－ノエル ロベール　Jean-Noël A. ROBERT 二十一世紀の漢文――死語の将来	01.11.15
123	99.11.16	ヴラディスラブ ニカノロヴィッチ ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち	01.6.26
124	99.12.14	楊 暁捷　X. Jie YANG 鬼のいる光景――絵巻『長谷雄草紙』を読む	00.3.31
125	00.1.11	エミリア ガデレワ　Emilia GADELEVA 年末・年始の聖なる夜――西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究	00.7.14
126	00.2.8	李 応寿　LEE Eung Soo 東アジア獅子舞の系譜――五色獅子を中心に	01.2.15
128	00.4.11	ペッカ コルホネン　Pekka KORHONEN アジアの西の境	00.10.20
129	00.5.9	金 貞禮　KIM Jeong Rye 五・七・五、日本と韓国	01.12.25

96	97.5.13	デニス・ヒロタ　Dennis HIROTA 日本浄土思想と言葉――なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか	98.3.31
97	97.6.10	ヤン・シコラ　Jan SÝKORA 近世商人の世界――三井高房『町人考見録』を中心に	97.12.15
99	97.9.9	ポーリン・ケント　Pauline KENT 『菊と刀』のうら話	98.9.15
101	97.11.11	金 禹昌／リヴィア モネ／カール モスク／ヤン シコラ／鶴田欣也　KIM Uchang / Livia MONNET / Carl MOSK / Jan SYKORA / TSURUTA Kinya パネルディスカッション 日本および日本人――外からのまなざし	98.3.31
102	97.12.9	ジョナ・サルズ　Jonah SALZ 猿から尼まで――狂言役者の修行	02.7.1
104	98.2.10	高 文漢　GAO Wenhan 中世禅林の異端者――一休宗純とその文字	98.9.15
108	98.6.9	島崎 博　SHIMAZAKI Hiroshi 化粧の文化地理	98.9.15
109	98.7.14	丘 培培　Peipei QIU なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか――詩的イメージとしての典故	00.5.1
111	98.10.6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA 愛玩――安岡章太郎の「戦後」のはじまり	99.3.15
112	98.11.10	アリソン トキタ　Alison McQUEEN-TOKITA 「道行き」と日本文化――芸能を中心に	99.3.15
114	99.1.12	杜 勤　DU Qin 「中」のシンボリズムについて――宇宙論からのアプローチ	99.3.15

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
80	95.12.19	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリューシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 俳句の国際性──西欧の俳句についての一考察	97.1.25
82	96.2.13	ジェイ・ルービン　Jay RUBIN 京の雪、能の雪	96.12.15
84	96.4.16	リース・モートン　Leith MORTON 日本近代文芸におけるゴシック風小説──泉鏡花と谷崎潤一郎の場合	97.1.25
85	96.5.28	マーク・コウディ・ポールトン　Mark Cody POULTON 能における「草木成仏」の意味	96.12.15
86	96.6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO 社会的構築物としての相撲──報恩古式大相撲の事例を巡って	97.2.15
89	96.10.1	王 秀文　WANG Xiu-wen シャクシ・女・魂──日本におけるシャクシにまつわる民間信仰	97.2.15
91	96.12.17	陳 生保　CHENG Sheng Bao 中国語の中の日本語	97.5.30
92	97.1.21	アレキサンダー N. メシェリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV 奈良時代の文化と情報	97.12.25
94	97.3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 弁当と日本文化	01.10.15
95	97.4.15	ミケーレ・マルラ　Michele F. MARRA 弱き思惟──解釈学の未来を見ながら	97.12.15

55	93.7.13	ツベタナ・クリステワ　Tzvetana KRISTEVA 涙の語り――平安朝文学の特質	95.2.15
56	93.9.14	金 容雲　KIM Yong-Woon 和算と韓算を通してみた日韓文化比較	94.5.27
57	93.10.12	オロフ G. リディン　Olof G. LIDIN 徳川時代思想における荻生徂徠	94.5.27
58	93.11.9	マヤ・ミルシンスキー　Maja MILČINSKI 無常観の東西比較	94.5.27
63	94.4.12	リチャード・トランス　Richard TORRANCE 出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930	94.11.5
68	94.11.15	賈 蕙萱　JIA Hui-xuan 中日比較食文化論――健康的飲食法の研究	95.5.10
70	95.1.10	ミハイル・ウスペンスキー　Michail V. USPENSKY 根付――ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に	96.2.20
71	95.2.14	厳 招璗　YAN Shao Dang 記紀神話における二神創世の形態――東アジア文化とのかかわり	96.2.20
72	95.3.14	王 家驊　WANG Jiahua 渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	95.6.20
73	95.4.11	アリソン・トキタ　Alison TOKITA 日本伝統音楽における語り物の系譜――旋律型を中心に	96.3.25
74	95.5.9	リュドミーラ・エルマコーワ　Lioudmila ERMAKOVA 和歌の起源――神話と歴史	95.11.10
77	95.9.26	蘇 徳昌　SU Dechang 日中の敬語表現	96.3.20
78	95.10.17	李 均洋　LI Jun Yang 雷神思想の源流と展開――日・中比較文化考	97.12.15

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
36	91.10.8	王 暁平　WANG Xiao Ping 中国詩歌における日本人のイメージ	93.7.16
37	91.11.12	辛 容泰　SHIN Yong-tae 日本語の起源──日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る	92.9.10
38	91.12.10	洪 潤植　HONG Yoon Sik 古代日本佛教における韓国佛教の役割	93.7.16
39	92.1.14	サウィトリ・ウィシュワタナン　Savitri VISHWANATHAN インドは日本から遠い国か？──第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変遷	93.6.10
41	92.4.14	リブシェ・ボハーチコヴァー　Libuše BOHÁČKOVÁ チェコスロバキアにおける日本美術	93.7.16
45	92.9.8	王 勇　WANG Yong 中国における聖徳太子	94.11.5
46	92.10.13	李 栄九　LEE Young Gu 直観と芭蕉の俳句──俳論を中心に	93.8.20
47	92.11.10	ウィリアム D. ジョンストン　William D. JOHNSTON 日本疾病史考──「黴毒」の医学的・文化的概念の形成	93.7.16
48	92.12.8	マノジュ L. シュレスタ　Manoj L. SHRESTHA アジアにおける日系企業の戦略転換──技術移転をめぐって	95.1.25
49	93.1.12	朴 正義　PARK Jung-Wei キリスト教受容における日韓比較	93.10.15
51	93.3.9	清水 義明　SHIMIZU Yoshiaki チャールズ L. フリアー（1854~1919）とフリアー美術館──米国の日本美術コレクションの一例として	94.5.27
52	93.4.13	金 春美　KIM Choon Mie 日本近代知識人の思想と実践──有島武郎の場合	93.10.15

16	89.10.3	汪 向榮　WANG Xiang-rong 弥生時期日本に来た中国人	90.1.31
17	89.11.14	ジェフリー・ブロートベント　Jeffrey BROADBENT 地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較	94.11.5
18	89.12.12	エリック・セズレ　Eric SEIZELET 日本の国際化の展望と外国人労働者問題	90.2.15
19	90.1.9	スミエ・ジョーンズ　Sumie JONES レトリックとしての江戸	92.9.25
20	90.2.13	カール・ベッカー　Carl BECKER 往生──日本の来生観と尊厳死の倫理	91.3.29
21	90.4.10	グラント K. グッドマン　Grant K. GOODMAN 忘れられた兵士──戦争中の日本に於けるインド留学生	91.3.29
24	90.7.10	李 国棟　LI Guodong 魯迅の悲劇と漱石の悲劇──文化伝統からの一考察	91.6.20
25	90.9.11	馬 興国　MA Xing-guo 正月の風俗──中国と日本	92.12.5
26	90.10.9	ケネス・クラフト　Kenneth KRAFT 現代日本における仏教と社会活動	93.1.30
28	91.1.8	カレル・フィアラ　Karel FIALA 言語学からみた「平家物語・巻一」の成立過程	91.10.15
29	91.2.12	アレクサンドル A. ドーリン　Aleksandr A. DOLIN ソビエットの日本文学翻訳事情──古典から近代まで	93.1.30
31	91.4.9	ミコワイ・メラノヴィッチ　Mikołaj MELANOWICZ ポーランドにおける谷崎潤一郎文学	92.3.30
33	91.6.11	サトヤ B. ワルマ　Satya B. VERMA インドにおける俳句	92.9.10
35	91.9.10	ドナルド M. シーキンス　Donald M. SEEKINS 忘れられたアジアの片隅──50 年間の日本とビルマの関係	92.9.25

日文研フォーラム報告書刊行一覧

回数	開催日	スピーカー／発表タイトル	発行日
3	88. 2.19	リー・A・トンプソン　Lee A. THOMPSON 大相撲の近代化	88.11.30
5	88.6.14	宗 彙七　SONG Whi-chil 日本陽明学の一断面――大塩平八郎研究の問題点	91.3.29
7	88.10.11	スーザン・ネイピア　Susan J. NAPIER 近代日本小説における女性像――現実と幻想	89.1.31
8	88.12.13	ジェームズ C. ドビンズ　James C. DOBBINS 仏教に生きた中世の女性――恵信尼の書簡	89.4.28
9	89.2.14	厳 安生　YAN An Sheng 中国人留学生の見た明治日本	89.7.31
10	89.4.11	劉 敬文　LIU Jingwen 教育投資と日本の戦後経済高度成長	89.8.31
11	89.5.9	スザンヌ・ゲイ　Suzanne GAY 中世京都における土倉酒屋――都市社会の自由とその限界	89.9.30
12	89.6.13	夏 剛　HSIA Gang インタビュー・ノンフィクションの可能性――猪瀬直樹著「日本凡人伝」を手掛りに	89.10.31
13	89.7.11	エルンスト・ロコバント　LOKOWANDT Ernst 国家神道を考える	91.3.29
14	89.8.8	キム・レーホ　KIM Rekho 近代日本文学研究の問題点	92.10.5
15	89.9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND 江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題	93.6.10

日文研フォーラム報告書の刊行は、本書が最後となります。
これまで刊行された報告書の全文は、日文研のウェブサイトでご覧いただけます。

http://publications.nichibun.ac.jp/

＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2018 年 3 月 30 日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町 3-2
http://www.nichibun.ac.jp/
＊＊＊＊＊＊
© 2018 国際日本文化研究センター

■ 日時

2013年2月12日（火）

午後2時～4時

■ 会場

ハートピア京都

第二六四回　中日文化異同論の推移―近代以降の日本と欧米の学界を中心に―

張　翔

国際日本文化研究センター